

花のめ町の元盗人・基次郎

久我 緑

一人の男が、花のき村にやってきました。

橋のもとに着くと、男は手を合わせました。そこには小さなお地藏さまがありました。

「お地藏さま、これからは盗人をしないで生きていけるよう、わしを導いてください」

かつて男は盗人でした。四人の弟子と一緒に、この花のき村で盗みをしようとしたことがありました。でも、あることをきっかけに、盗みをやめ、自分から罪を告白しました。当時、盗人は死罪でした。しかし、自分から告白したので罪が軽くなり、遠い島で十年ほど働くことで許されました。そうして今日、島から戻ってきたのです。

「わしは、弟子に、二度と盗人になるなど言った。弟子に言ったことは、自分も守らなくちゃいかん。わしは、かしらなのだから」

お腹がぐう、と、鳴りました。朝から何も食べていません。盗人だったころなら、だれかのさいふをねらったでし

よう。しかし、もうそれはできません。かしらは首をふり、空を見ました。白い雲がもちに見え、ますますお腹がすきました。

「おじちゃん」

かわいらしい声がありました。ふり向くと、ぞうりをはいた七歳くらいの男の子が、子牛を連れて立っていました。

「この牛を花のめ町のお寺に届けておくれ」

男の子は牛のたづなをかしらにわたすと、さっさと行ってしまいました。

「わしが盗人をやめるきっかけは、子どもに子牛をあずけられたことだったな」

かしらは、その時のことを思い出しました。あの時、子どもが自分を信じてくれたことが、うれしくてたまりませんでした。そして今、また、自分を信じて牛をあずけてくれた子がいる……かしらの目頭が熱くなりました。

かしらは、そっと涙をぬぐうと、子牛を連れて歩き出し